

江戸時代に生まれた新しい文化と それを支える産業・交通を読み解く

～歌舞伎から伊能図まで～

●公立大学法人 名城大学国際学部 特任教授・玉川大学 名誉教授 寺本 潔

「将軍のおひざもと」とよばれ、人口100万超の大都市に成長した江戸は、五街道も整備され、全国から多くの人やものが行き来しました。「天下の台所」と称される大阪と合わせ、地図帳から江戸時代の新しい文化と産業・交通を読み解きます。

1 屋台を引く祭りや歌舞伎・人形浄瑠璃・浮世絵の繁栄は江戸時代

江戸時代には、屋台（山車）や燈籠が登場する祭りや歌舞伎・人形浄瑠璃・浮世絵は人々の楽しみとして各地に広まり、通りや芝居小屋は見物客で賑わいました。近松門左衛門や葛飾北斎・歌川広重、松尾芭蕉も登場する江戸時代の文化は現代にも受け継がれています。令和6年度版『楽しく学ぶ 小学生の地図帳』（以下、地図帳）の「広く見わたす地図」(p.21～30〈*p.19～28〉)には、戦国時代から江戸時代に生まれた安来節、鷲舞、阿波おどり、兼六園、高山祭、秩父夜祭、偕楽園、秋田竿燈まつり、青森ねぶた祭（人形型）をはじめ多くの祭りや行事、庭園、城、工芸品、芸能のイラストが載っています（図1）。また、p.69～70「江戸（江戸時代後期）」には、歌舞伎や奉納相撲もあります。

文化の発信地を地図帳で確かめることは、文化が各地にどのように広がり変化・定着したかという「伝播と変容」の観点からも大切な見方を養う



図1 江戸時代に発達した祭りや庭園の例

令和6年度版『楽しく学ぶ 小学生の地図帳』 p.25～27

* 〈 〉は、令和2年度版『楽しく学ぶ 小学生の地図帳』のページをさす。

こととなります。「各地にはいろいろな祭りがあるけれど、屋台に飾りをつけて引いたり、何かを願って踊ったり、粋で勇ましい姿を示すことは共通しているようだね」とイラストを見比べさせながら、類似点を見つける読み解きも興味深いです。

2 街道と航路の整備で生じた各地の産物とその流通を想像する

島原・天草一揆（1637～1638年）の後、幕府は長崎だけに貿易港を絞る「鎖国」政策を敷いたことは有名です。半面、そのことが各藩で自律的に国内生産を発展させ、特産物や工芸品が生まれました。加えて、参勤交代の制度化により街道や大阪を中心に全国をつなぐ航路も整備が進みました。北前船や街道を使って昆布や米、塩、酒や人の行き来が盛んになりました。

この時代の産物の中で筆者が注目した産物が3つあります。最上紅花と砂鉄、薩摩上布です。それらを地図帳で確かめようと地方図（地図帳 p.75～76〈p.67～68〉）を開くと、山形県に「べにばな」の産物記号（🌸）がありました（図2 A）。西には「阿波の藍玉」、東には「最上紅花」と称される江戸時代の二大染料の一つがこれです。紅花（紅餅に加工）から手に入る染料のおかげで京都の着物文化（西陣織や化粧用の紅）が彩られました（輸送には最上川を下り、酒田港から海路敦賀へ、そこから陸路で京都へ）。2点目は、島根県の山間部（地図帳p.39～40〈p.37～38〉）に「菅谷たたら山内」（映画『もののけ姫』の舞台モデル）と印字された史跡・名勝記号（♣️）が製鉄を物語っています（図2 B）。砂鉄のおかげで江戸時代の新田開発を支えた備中ぐわ・千歯こき（農具）、武士が使う日本刀が普及できたのです。

6年 地図活用のポイント



- 1 地図帳に掲載された各地の産物記号やイラスト、史跡・名勝から、江戸時代に生まれた文化や産業・交通を想像することができる。
- 2 伊能忠敬の日本地図と地図帳を見比べる経験から、正確な地図が持つ価値や測量への興味を育み、学問を積む生き方の大切さに気付かせる。



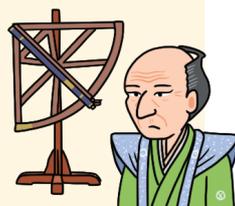
A ベにばな



B 菅谷たたら山内



たたら製鉄の高殿



C 八重山上布・宮古上布



図2 地図帳から読み解く江戸時代に流通した産物の例
令和6年度版『楽しく学ぶ小学生の地図帳』p.34、39、76

3点目は、薩摩上布です。しかし、鹿児島県が載っている「九州地方」の頁でいくら文字や産物記号を探しても薩摩上布という織物は見つからないのです。実は、その正体は琉球で産した宮古上布と八重山上布（地図帳p.33～34(p.31～32)）だったので（図2 C）。薩摩の琉球支配が見え隠れします。

このようにして、地図帳から見いだせるイラストや産物記号、史跡・名勝の記号から、江戸時代の文化と産業・交通の様子が想像できるのです。江戸時代の各地の文化や産業・交通の学習は、「位置や分布」をとらえた上で「空間的相互依存作用」（地図から複数の場所の結び付きを読み取り、人々の活動の様子と関連付けてとらえる力）を示し、現代まで続く地方の土地柄は「地域」といった基本概念を育みます。

3 伊能図と地図帳を見比べる経験が地図や測量への興味を育む

何といたっても正確な日本地図を完成させた伊能忠敬の功績は忘れることはできません。56歳を超えてから17年かけて蝦夷地から屋久島まで3万5,000kmもの距離を測量して歩いたのです。どうして伊能は正確な日本地図づくりに挑んだのか、自身の学問への興味に加え、海防の必要性や測量術の進歩という背景にも気付かせたいものです。教材としての伊能図は「古地図コレクション」のサイトで閲覧したり、オンラインショップなどで紙の複製地図（市販）で入手できます。特に中図とよばれる伊能図では海岸線や街道筋が詳しく読み解けます。伊能中図で自県がどのように描かれているか、地図帳と見比べるとその正確さに驚かされます。筆者は筑波大学附属小学校教諭であった頃、伊能忠敬の歩測に触発され、校庭に児童を連れ出し、簡単な測量により地図づくりを試みたことがあります。伊能の測量隊が掲げた御用の旗を示しつつ通学路や校庭を測量する真似も、よき経験になるでしょう。

【参考文献】
寺本潔「児童の歩測による地図づくり」『新地理』第31巻第3号p.13～17 1983 日本地理教育学会
古地図コレクション <https://kochizu.gsi.go.jp>